



大分の森づくりストーリー

case.3

大分県内における企業や団体が独自に取り組んでいる森づくりの事例をご紹介します。

佐伯市 森と海のつながり（大分県佐伯市海岸）



瀬会（ぜあい）海岸と魚つき保安林



日本文理大学 名誉教授 ^{すぎうら よしお} 杉浦 嘉雄さん

動画再生 ▶



はじめ

東北地方で始まった「森は海の恋人」を掲げた植林活動が広がっています。この活動の基本的な考え方は「山の恵みが豊かであれば、海の資源も豊かになる」という思いです。魚つき林という言葉がありますが、約400年前、森林資源を守ることが魚類の生息・繁殖を助けるという魚つき林の考え方をもとに、日本で初めてお触書「山しげらず候へば、いわし寄り申さず候。」を出したのが佐伯藩でした。

森づくりの取組

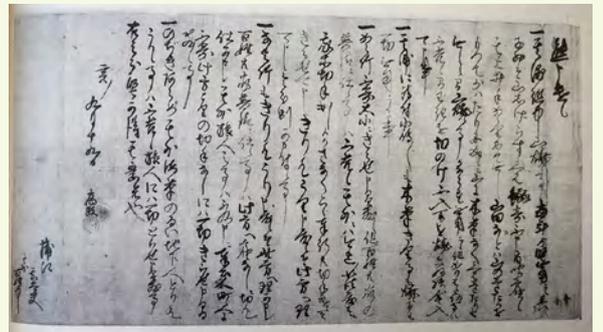
「佐伯の殿様、浦でもつ 浦の恵みは山でもつ」という考えを受け継ぎ、魚つき林を次世代へつなぐため、佐伯では魚つき林を含めた観光マップを作るなどの活動が行われています。また、すぐ近くに学校林が広がる佐伯市立東雲中学校では、歴史や自然、魚つき林の素晴らしさを多くの人に伝えるパンフレットも作成しています。

未来に向けて

魚つき林には、日陰をつくり魚を天敵から守る、土砂流出や砂ぼこりを防ぐ、雨が降れば黒土から染み出した栄養たっぷりの水が海に供給されるなど、様々な機能があるとされています。森林保全が海の多様性の保全へつながる科学的な裏付けについては、近年解明されつつあります。ほかにも世界農業遺産に認定された国東半島と宇佐地域の、くぬぎ林とため池がつなぐ農林水産循環など、大分県が誇る貴重な資源を守っていくことが大切です。

※魚つき保安林について

約400年前に佐伯藩では魚つき林を守るためのお触書が出されましたが、明治時代になると森林法が制定され、魚つき林の思想は「魚つき保安林」として伐採を制限し、保全する制度につながっています。現在、大分県全体の魚つき保安林の面積における約8割を佐伯市が占めています。



「佐伯藩初代藩主 毛利高政が出したお触書」
～御手洗 東洋 著 「触艘千里 蒲江浦 御手洗家の歩み」より～



間越（はごこ）海岸



魚つき保安林の標柱



佐伯市消防署壁画（ジョーヤラ船）



瀬会（ぜあい）海岸周辺宝ものマップ